
ジョーカーな狐と狸さん

ぺんぱるぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーカーな狐と狸さん

【Nコード】

N8951Z

【作者名】

ぺんぱるへ

【あらすじ】

隔離された世界。鬼と呼ばれる化け物とこの世界は密接な関係にある。鬼は人を喰い殺し、ときには、鬼は人に能力を与える。中央エリアの片隅に住む香宮司（かみやうじ） 旧介（きゅうけい）は、復讐相手を探し続けていた。そして、復讐相手とうりふたつの少女が目の前に現れる。少女は頬を赤く染め、小さな声で告白した。「あなたのストーリーカーです。大好きです、付き合ってください！」僕さま青年とストーリーカー少女のお話です。

狐さんの世界の終わり（前書き）

初めまして。

小説と言えるかも分からない代物ですが、お読み頂ければ幸いです。

狐さんの世界の終わり

その日、香宮司（かみやうじ） 旧介（きゅうけい）の世界は終わりを迎えた。何よりも大切で、陳腐な言葉を使うなら愛していたと表現しても良いような、掛け替えのない世界であった。

最後は笑ってしまうほどに呆気ないものだ。馬鹿馬鹿しいものでもしかなかった。

それでも、そんなくだらない崩壊でしかなかったとしても、旧介には永遠のことに思えて仕方ない。

自慢の長い髪を優雅に揺らし、旧介の全てであった彼女は美しく微笑んだ。神がいるならば、彼女のような存在であるのかもしれない。そう思わせる程のものを彼女は持っていた。

すらりとした足が、ゆっくりゆっくりとこちらへ近づいて来る。旧介は逃げなかった。いや、正確に言うならば、逃げることなどできなかつた。誰がこの状況で彼女から逃れられるだろうか。

旧介の身体はもうボロボロだった。腕は折れ、腹は切り裂かれ、激痛にただ堪えるだけしかできないような状態である。しかし、だからといって、旧介が無傷で体力も有り余っていたとしても、彼は逃げるなどという愚かな選択はしなかつただろう。

旧介の世界は終わったのだ。彼女は旧介の世界を作り上げ、慈しみ、そして破壊した。彼女がそうしたのだ。いや、彼女は彼女であって、彼女ではないのかもしれない。しかし、もうそんなことはどうでもよかつた。

彼女は旧介を殺すだろう。簡単に、一瞬で全てを終えるに違いない。それはあまりに残酷であり、恐怖であり、そして何よりも幸福なことであるのだ。たとえ旧介がここで生き残ったとして、何が残

るといふのか。何も残らない。なぜならば、それが香宮司 旧介であつたからだ。彼女が居て、初めて彼は息をすることができる。

「お前は笑うのね」

鈴を鳴らしたような、澄んだ声音だつた。

聞き親しんだ彼女の声は、こんな時でさえあまりに心地よく旧介の鼓膜を侵していく。

地面に倒れ込んだ旧介を真つ直ぐに見下ろす彼女は、どこまでも美しい存在だつた。

「逃げないのか？私はお前を殺すのに。それは何があつても変わらないし、変えられない選択だ」

「逃げて、欲しいの、か？」

呼吸をしただけで苦痛に悲鳴をあげる身体を酷使して、どうにか声を紡ぎだす。彼女からの言葉を無視するなどできるわけがない。彼女を見上げ、旧介は笑いかけた。

それを見て、彼女は初めてその笑みを崩してしまった。不愉快そうに曲げられた眉も、軽蔑していることを何より物語る細められた目も、何もかもがただ美しく、愛おしい。

恍惚とした表情を惜し気もなく晒す旧介を一瞥し、彼女は『彼女』を演じることをやめた。

「……私は長生きしているからさ、人間なんてそりゃあ腐る程見てきたよ」

先程までとは何もかもが違う低い声と不機嫌に歪められた顔。もはやそれは彼女ではなかつた。

「でもアンタみたいな気持ち悪いやつ見たのは初めてだ。最低最悪な気分になった、すげえ吐きそうだし」

「死ぬ」

「おや、やっぱり私じゃ優しくしてくれないのかな？そっちの方が似合ってるよ、アンタ」

「黙れ、カスが。僕はあの人にしか用など無いんだよ、早くくたばれ」

「素敵な言葉と憎悪だね、アンタやっぱりいいよ。そっちの方がかっこいいし、私のタイプだわ」

今までの心酔しきった感情は瞬く間に消滅する。今、旧介にあるのは酷い憎しみと嫌悪感だけであった。

それは夢を見ていたようにも思えることだ。悪夢ではない。素晴らしい幸福な、死んでも覚めたくない、そんな夢である。しかし、夢は何があらうと夢でしかない。夢は終わる。旧介の世界が終わるように。無情なまでに、一切の慈悲もなく。

彼女はもう彼女ではない。彼女の姿をした化け物だ。化け物よりもっと酷いものかもしれない。旧介は彼女の皮を被ったそれを睨みつけた。それは愉快そうに肩をすくめるだけだ。

（殺してやりたい。いや、そんなもんじゃ足りないだろうが…。このカスが存在していたその事実を消してやりたい。それができれば、僕は笑って死ねるだろうによ）

旧介の視線を考慮したのか、そいつはしゃがみ込んだ。彼女の目から通されるそいつの視線は不快でしかなかった。

旧介は静かに目を閉じる。旧介が見たかったものは、彼女だけだ。あとは何もいらぬ。むしろ、邪魔な不要物でしかない。

「私はお前を結構気に入ってるんだよ、旧介」

「気安く、名前を、呼ぶな」

旧介と呼ぶことを許したのは、彼女以外にはいない。

「なあ、旧介」

吐きそうだと。

ねっとりとした重い声が身体にのしかかる。それは旧介を決して逃がしてはくれない。

「私を殺しにおいで」

からからとそいつが愉しそうに笑い声をあげる。

殺しに行くに決まっているだろう。もはや傷の影響で声も出ない。それでも、旧介はそいつへの復讐を誓った。忘れたくとも忘れられない、最低の誓いだった。

「約束だよ、旧介」

そうして、世界は静かに崩壊を迎えた。何も残らない筈のその世界には、憎悪と殺意だけが暗く、しかし、確実に残っている。

殺してやる。そう息もなく吐き出したと同時に、旧介の意識は途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951z/>

ジョーカーな狐と狸さん

2011年12月28日02時46分発行